

彙報

相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

相愛大学総合研究センターでは、2012年度より学内の様々な分野の教員の専門的知識を活用し、また教員間の交流を活性化することを目的に、共同研究を発足した。その最初のプロジェクトとして、「日本における諸学問の近代史」と題された共同研究を行ってきた。同共同研究は、各年度5回の研究会を中心に進められ、今年度で終了した。

「日本における諸学問の近代史」研究会は、日本近代における様々な学問領域の展開を、単なる学説史として整理するのではなく、学際的に再構成することを通じて日本近代の一断面を把握するとともに、学問が日本近代の社会において演じてきた役割を再検証することを目的とした。同研究会は学内の教員を主要なメンバーとしたが、学外からも講師を招聘し、また学内外を問わず参加者を募り、開かれた共同研究として開催された。その成果は、各年度末に公開講座において紹介し、さらに来年度にあらためて公刊する予定であるが、ここに第11回から第15回までの研究会の概要を報告する。各回の概要は以下の通りである。

第11回

報告者：千葉真也

(相愛大学共通教育センター教授)

テーマ：国文学史の誕生

日時：2014年5月20日(火)

午後5時～午後7時30分

場所：相愛大学6号館234号室

参加者：9名

千葉真也氏による報告は、正岡子規『歌よみに与ふる書』（1898年）が古今和歌集を批判

し、万葉集を和歌のいわば聖典と位置づけて以来、日本文学史上、万葉集は特別な位置を与えられることになったとする日本文学史（『国文学史』）の通説を、批判的に再検証するという趣旨であった。西洋（とりわけイギリス）の文学史というディシプリンを参照し出発した『国文学史』であったが、その草創期に提起された正岡子規のパースペクティヴは、その後の国文学史の学説に影響を与えたとされてきた。しかし、1890年前後に遡る『日本文学史』や『国文学史』などと題された本を再検討すると、すでに正岡子規以前から万葉集を聖典と位置づける見解が見られることが明らかにされた。そこで、では何故、万葉集が聖典化されたのかが問われ、草創期の国文学史研究者の多くが帝国大学などで国学者から教育を受けていること、国学では万葉集が特権的位置を占めていることなどに焦点が合わされ、万葉集の聖典化の背景には国学の影響があるのではないかとの仮説が提示された。

報告後には質疑応答が行われ、和歌の実作者と国文学史研究者との認識のズレ、近代化としての国文学史の誕生と民族的「起源」としての古代への遡行との関係性、秩序の再創造としての近代化とその準拠としての「起源」との関係性などについて討議され、近世と近代との知的断絶や古代への遡行としての近代化といった問題について再検証する必要性が確認された。

第12回

報告者：佐々木隆晃

(相愛大学人文学部准教授)

テーマ：浄土真宗における聖典の歴史と意義

日 時：2014年6月17日（火）

午後5時～午後7時30分

場 所：相愛大学6号館234号室

参加者：9名

佐々木隆晃氏による報告は、浄土真宗における聖典、すなわち「聖教」の歴史を振り返りながら、それぞれのテキストがいかにして「聖教」のステイタスを得るに至ったかという問題に注目することで、その意義を明らかにするという趣旨であった。「聖教」の制度化は、教団の核となるテキストを広く社会に公開することを通じて、教団の理念を鮮明にすることを意味し、そのことはとりわけ、明治以降、国に先駆け近代的な制度を導入してきた浄土真宗本願寺派にとって、公開性という近代的組織原理の整備にどのように関わるのかを、言い換えれば、近世以前と近代との連続性の問題を問うことを意味する。例えば、『教行信証』は親鸞自身の手によって、成立後間もない頃から、選ばれた門弟に授与された。また、「和語聖教」や書写された「聖教」は多くの門弟に贈られており、さらにその後の門主もまた「聖教」を門弟・門徒に授与し、教団の理念を明らかにするよう努めた。さらに江戸時代には、書店が『教行信証』を刊行したのを機に、本願寺は自ら「聖教」を刊本によって公開するに至った。こうした歴史が、聖典の公開性の保障に寄与したとの仮説が提示された。

報告後には、テキストの書写と授与などの慣習が歌学にも見られたことから中世文化としての共通性や、江戸期の書店と本願寺との関係性、刊本の流布による「聖教」の権威の変化、刊本化に際してのテキストの扱われ方、とりわけ考証学・文献学的対象化の問題などにつき討議され、聖典の問題を通じて近世・近代の連続性・断絶を探究する可能性が確認された。

第13回

報告者：長谷川精一

（相愛大学共通教育センター教授）

テーマ：言語教育の比較史的視角から見た〈沖縄方言（地域言語）、日本語（国語）、英語（国際語）〉

日 時：2014年9月16日（火）

午後5時～午後7時30分

場 所：相愛大学本部会議室

参加者：8名

長谷川精一氏による報告は、言語教育における地域言語、国語（国家語）、国際語の位置づけ・関係性の歴史の変遷について考察し、さらに近年の英語公用語論に一石を投じるという趣旨であった。その際、地域言語として注目されたのが沖縄方言であり、国際語として取り上げられたのが英語であった。沖縄県設置（1879年）以来、沖縄では日本語教育が強制されたが、国民国家体制の安定化と資本主義経済の定着とともに、沖縄では日本語が一種の文化資本と考えられ、積極的に標準語励行運動が展開されるにいたった。その背景となったのは、日本語を頂点として、沖縄語、奄美語、国頭語、宮古語などの諸言語の階層秩序が存在するという認識であった。しかし、沖縄方言を解さない世代が増えると、むしろ地域言語を尊重する運動が始まる（1970年代）。さらに、1990年代には中央政府が「郷土愛」の育成を通じて「愛国心」を涵養するという観点から、方言尊重を主張することになる。一方、国際語としての英語教育は、森有礼が英語採用論を主張して以来、近年の英語公用語論にいたるまで、その必要性が度々繰り返して唱えられてきたが、それは国家語と地域言語との関係性の問題と無縁ではなく、政治的な英語教育論は、実際には、英語を頂点とし地域言語を底辺とする言語の階層秩序

を前提としているという視点が提示された。

報告後には質疑応答が行われ、方言尊重論の背景や、アイデンティティとしての言語論、英語＝国際語論の背景、さらには標準語励行運動の具体的内実などについて討議され、地域言語論を単に国家と地域との関係においてのみ検討するのではなく、西洋による国際秩序の構築以来のグローバル秩序における言語教育という観点から、国際語論をも視野に入れた言語の階層秩序の問題として再構成する必要性が確認された。

第 14 回

報告者：太田美穂

(相愛大学人間発達学部教授)

テーマ：食の近代化と栄養学

日 時：2014 年 10 月 21 日 (火)

午後 5 時～午後 7 時 30 分

場 所：相愛大学 6 号館 234 号室

参加者：17 名

太田美穂氏の報告は、栄養学の対象領域を画定したうえで、この対象領域の歴史や語源に遡り、日本における栄養学の成立と草創期の展開を検証する趣旨であった。すなわち、18 世紀に化学の一分野として誕生し、その後、栄養素の発見とともに化学と医学にわたって研究領域が確定されたが、日本ではまず、19 世紀後半に「富国強兵」のための日本人の体位向上の観点から西洋食奨励とともに、栄養学的研究が受容された。その意味で、日本では、政治的関心と密接に関係して栄養学的研究が確立されたのだが、この研究が大きく飛躍する契機となったのが、日清・日露戦争期の軍隊における脚気の撲滅のために研究だった。この研究は、その問題関心のために陸軍・海軍によって担われることになったが、それは単に政治的目的に資する

ものではなく、ビタミンの発見という大きな成果を生むことになる。そこから、栄養学は学知として固有の地位を確立することになった。

報告後には質疑応答が行われ、日本と西洋における栄養学的研究の相違、栄養学の体系化の経緯、日本における草創期の栄養学的研究の学閥争い、国策として栄養学的研究が推進されたにもかかわらず高等教育機関ではなく軍隊に担われた理由、ドイツ医学とイギリス医学という日本における対立構図とその功罪などについて討議され、日本における学問の近代を、単に西洋の学問の受容としてのみ考察するのではなく、非西洋の近代化固有の現象をも視野に入れることで、近代の世界的展開を西洋と非西洋とのユニラテラルな関係として理解する短絡を克服する可能性が確認された。

第 15 回

報告者：新屋千樹 (都市再生機構事業戦略室特定戦略チームリーダー)

テーマ：近代日本における都市計画の歩み

日 時：2014 年 11 月 18 日 (火)

午後 5 時～午後 7 時 30 分

場 所：相愛大学 6 号館 234 号室

参加者：8 名

新屋千樹氏の報告は、まず明治初期以来の日本における都市計画の歴史を概観したうえで、日本の都市景観の現状をヨーロッパのそれと比較しつつ、歴史的に考察するという趣旨であった。近代日本の都市計画は、欧化政策の一環としての「銀座煉瓦街計画」に始まり、その後反動期をはさみながらも、とりわけ西洋諸国との間の不平等条約改正を目的とした西洋的な都市計画へと展開するが、明治憲法体制が確立され、日本における産業革命が始まった 1890 年前後には、急激な都市化に対応するため機能的

な都市像が追求され、上下水道や鉄道が整備される。大正期に入ると都市拡大の必要性から、旧都市計画法による区画整理、道路・公園建設が進められ、さらに関東大震災後の復興として大幅な改造も行われる。しかし、高度成長後、スプロール現象に対応する必要性から新都市計画法のもと再整備が行われ、現在に至った。こうして西洋化、機能化、拡大、再整備の歴史を辿ってきた日本の都市だが、西洋化の時代のみならず、度々、西洋の諸都市をモデルとした計画のもと整備されてきたにもかかわらず、無秩序な景観を帯びることになった。その差異の決

定的な要因として公共性の観念の欠如や「私空間志向」が指摘された。

報告後には質疑応答が行われ、アジアの都市との差異、都市景観における美の観念、内／外観念をめぐる西洋との差異、東日本大震災後の復興計画の現状、公共性観念をめぐる西洋との差異などについて討議され、日本における都市景観の歴史的な再検証に基づいた公共空間の再構築の必要性と可能性が確認された。

(文責：嘉戸一将)

相愛大学 主催

食と防災シンポジウム 2014

「備えてまっか〜！まさかの時の食Ⅲ」

9月の「防災月間」に食と防災の視点から、自助（個人）・共助（地域や大学など）・公助（行政、病院）の必要性の理解を深めるためにシンポジウムを実施した。今回のシンポジウムは、「地域との共助」をメインテーマとした内容で、一昨年、昨年に引き続き3回目の実施となる。災害から個人や家族、地域を守るためには、私たち一人一人が災害への認識を深め、備えを強化する事が重要である。それぞれの立場で日頃の備えを見直し具体的な取り組みが実践できるように、大阪府民、食の専門家ならびに大学生を対象にシンポジウムを企画している。大学は共助の立場からも広く地域との連携・支援を考えていくことが重要であり、また、シンポジウム当日、東北大震災での支援活動に使用された『JDA-DAT』が相愛学園の園内に展示され参加者の注目を浴びた。本学人間発達学部発達栄養学科は昨年に引き続き『若い世代に伝えたい！食と防災』をテーマに展示発表を行った。

1. 開催時期（日時）

平成 26 年 9 月 8 日（月）

13 時 20 分～16 時 10 分

2. 開催場所

相愛学園本町学舎講堂

3. 参加者の概要

参加者数：413 名

内訳：一般府民、食生活改善推進員、大阪府・市町村等行政関係者、学生、食品企業等関

係者等

4. 主催

相愛大学、大阪府、農林水産省近畿農政局大阪地域センター、大阪青山大学、（公社）大阪府栄養士会

5. 後援

健康おおさか 21・食育推進企業団、大阪府食生活改善推進連絡協議会、大阪市食生活改善推進連絡協議会

6. 協賛

大塚製薬株式会社大阪支店、大阪府焼菓子工業組合

7. 開催内容

1) 開会挨拶

大阪府健康医療部保健医療室健康づくり課
参事 山形三津留 氏

2) 講演（13：30～14：20）

「災害に備えること 地域との共助を考える」

関西大学社会安全学部准授

越山 健治 氏

3) パネルディスカッション（14：30～16：10）

テーマ「地域との共助を考える」

〈パネリスト〉

・関西防災デー「広がれ！みんなの安全・安心！」の取り組みについて

関西大学 高槻ミューズキャンパスグループ長 奥田 昌治 氏

・地域に貢献する日本栄養士会 JDA-DAT

兵庫県立がんセンター栄養管理部次長兼栄養管理課長 下浦 佳之 氏

・子育て世代の減災対策

相愛大学客員教授、農林水産技術会議委員
坂本 廣子 氏

〈コメンテーター〉

大阪青山大学健康科学部教授、（公社）大

阪府栄養士会会長 藤原 政嘉 氏
〈コーディネーター〉

相愛大学人間発達学部教授、相愛大学総合
研究センター長 太田 美穂

4) 閉会挨拶

農林水産省近畿農政局大阪地域センター長
池内 豊 氏

・司会進行：大阪府茨木保健所課長補佐

西本香代子 氏

8. 展示コーナー（12:30～16:10）

・府内特定給食施設における災害時の備え

大阪府保健所栄養士

・大阪産（もん）の紹介

大阪府環境農林水産部

・見てわかる実践台所防災

相愛大学客員教授 坂本 廣子 氏

・若い仲間に伝えたい！ 食と防災

相愛大学人間発達学部発達栄養学科

・関大防災デー「広がれ！みんなの安全・安心！」の取り組み

関西大学

9. 当日の打ち合わせについて

当日の会場設営、受付、後片付け、アンケート用紙の配布、回収などに相愛大学人間発達学部発達栄養学科の学生が終日ボランティアとして活動した。



発達栄養学科主任 宮谷秀一教授による挨拶

10. アンケートの実施と回答

・回収率は75.3%（311名）であった。

アンケート回答内容については後述する。

講演

「災害に備えること 地域との共助を考える」



【会場の声】

・災害に対する意識についてよく理解できた。
・災害の支援者になる事で自助の備えができる
という言葉が胸に残った。

パネルディスカッション



関西大学防災デー「広がれ！みんなの安全・安心！」



【会場の声】

若い人の力は重要だし、貴重なので良い取り組みをされていると思う。

「子育て世代の減災対策」



【会場の声】

家庭での備えの大切さを思い知った。
坂本先生の話をもっと聞きたい。

「地域に貢献する日本栄養士会 JDA-DAT」



【会場の声】

JDA-DAT という組織の活動や訓練の様子がよくわかった。

展示コーナー (12:30~16:20)



防災グッズ、災害時のレシピ、取り組み事例等の展示を多くの参加者が熱心に見学されていた。

見学コーナー



◆見学コーナー 2階運動場
(12:00~13:00 / 16:10~16:30)
災害支援医療緊急車両
「JDA-DAT河村号」



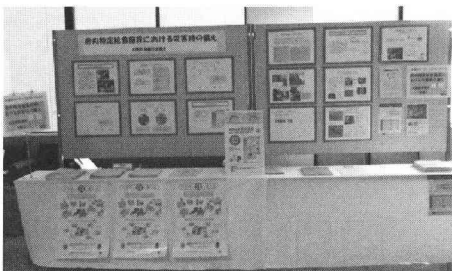
大阪に
初めて登場!

【見学者の声】

小型の車に必需品がコンパクトに備えられており、細い道路でも入っていける小回りのきく車と納得しました。

展示コーナー

「府内特定給食施設における災害時の備え」



【見学者の声】

レシピの展示が良かった。

「大阪産（もん）の紹介」

外国のものが
多い中、特に
大阪産を見直
したい。



「見てわかる実践台所防災」坂本廣子氏



【見学者の声】

防災用具をもっと増やそうと思った。

「若い仲間に伝えたい！ 食と防災」

相愛大学人間発達学部発達栄養学科



【見学者の声】

パンフが参考になった。

今の若者は知らないことが多いと思うので、良い機会だと思った。

関大防災デー「広がれ！みんなの安全・安心！」の取り組み



【見学者の声】

参加しやすいと思った。
多くの学生を含めた訓練はすばらしい。

《アンケート回答》(抜粋)

今回のシンポジウムに対して『参考になった、またはどちらかといえば参考になった』回答が94%と高く評価され、一定の成果を上げたと考えられる。

感想(自由記述欄より)

- ・自助、共助の大切さを感じていたが、もっと大切と思った。目的意識を共有していくことが大事と思う。
- ・地域との連携の必要性や大切さを感じた。地域で話し合う場、協力できる仲間作り、連携の必要性を実感した。
- ・若い力に期待したい
- ・21世紀は一人ひとりが知識を持つことが重要で、地域啓発の必要性を感じた。
- ・地域での活動や訓練の様子が大変参考になった。

〈共助のために取り組んでいこうと思った内容〉

全般

- ・自助をしっかりする(34名)
- ・地域の人との交流・協力・連携
- ・備蓄をしっかりしておく。
- ・ボランティアとして活動したい。

地域

- ・関大の炊き出しの実施は興味深く、町内の活動の参考になった。
- ・自治会にどのような機材があるかどうかの確認。
- ・会員同士の助け合いから近所の人々に繋げていく活動に取り組んでいこうと思います。
- ・防災の啓発を行政だけでなく地域ぐるみで取り組みを推進していきたい。

教育など

- ・栄養士として備蓄品を活用した栄養バランスの良いメニューを広げたい。
- ・「災害時のための食」を各地で実施したい。
- ・高校生たちにどのような取り組みをさせればよいかを考えさせたい。
- ・学校教育で防災教育を充実させ、地域に役立つ人材を育成する。
- ・保育所や幼稚園でも避難訓練だけではなく自助力UPさせられるトレーニングが必要と感じた。

〈シンポジウムで取り上げてほしい企画等 要望〉

- ・意識向上のためにも、シンポジウムは毎年実施してほしい。
- ・防災クッキングや試食の実施を希望する。
- ・ストックできる食材や食品の知識を得たい。
- ・避難生活が長くなる場合の大量調理の方法。
- ・産官学民が連携して取り組んでいる防災の例があれば知りたい。

